

# 文学研究にとって〈場〉とはなにか

## ——中国の地域文学研究について——

高橋 俊

### はじめに

本稿はタイトル通り「文学研究にとって〈場〉とはなにか」を考察するものであるが、話のマクラとして今、私の周囲で起きていることを書かせていただく。

高知大学のような地方国立大学では、近年、「地域貢献」の要求がたいへん強くなってきている。具体的には「地域科目（ご当地に関する内容を教える科目）」の開講であったり、「地元就職率」を上げることであったりする。さらには「地元で活躍する人と呼んで、講演や授業をしてもらう」というものもある。これらの項目が、往々にして数値のノルマを与えられ、次々に降ってくる、というわけである。

こうした施策の根底には、いわゆる「地域活性化」があると思われる。その「狙い」を大雑把にまとめれば、これからの日本において急速に進むとみられる少子高齢化に対応するため、中央からの交付金が頼りであった地方に「自立」を促す一方、大都市圏ではまかないきれない高齢者介護を地方に委ねる、ということになるだろう。

そのため日本の地方自治体は「お前の地域を活性化させろ。それがお前らの責務だ」「活性化しなければ将来はないぞ」と半ば恫喝されているのが実情であり、その余波を地方国立大学も受けているわけだが、そこで鍵となる（とされている）のが、「地域の特色＝地域性」である。今いわれている地域活性化とは、結局のところ「他にはない、この地域ならではの特色を生み出し、それによって国内外から“客”を呼び込み、お金を落としてもらうこと」とまとめられる。農業や漁業はもちろん、製造業も今後の成長を望めない以上、地域にできるのは「外の“客”にアピールし、自分たちの〈場〉を商品として買ってもらうこと」\*1しかないのだ、というメタメッセージとともに、「地域性を生み出せ」という要請が有無をいわさぬ強引さで押しつけられているのである。

しかしながら、「地域性」というのは、本来なかなか難しいものである。「高知が好きなので、地域活性化をやりたい」という学生に「高知の特色はなんだと思いますか？」と聞くと、たいてい「自然が豊かで、人が温かい」という答えが返ってくる。だがおそらく、徳島や、石川や、宮城で尋ねても、同じような答えが返ってくるだろう。

地域を商品として「売る」場合、マーケティングでは、まずは既存のキーワードに頼らざるをえない。「消費者」が「ああ、これね」とすぐに分かる「特色」でない限り、立ち止まってはもらえない。そこで「自然が豊か」「人が温かい」等のありふれたキーワードに頼りつつ、一方で「他との違い」を打ち出し、差異化するという、難しい手続きが必要になる。そこで日本の各地域は、往々にしてゆるキャラやB級グルメなどといった規定のカテゴリーに参画した上で、「うち他地域とは違うんだ」「焼きそばではなくラーメンなんだ」と広報していくという手法を取らざるをえないのである\*2。

「移動の時代」といわれた20世紀を経て、グローバリズムが（掛け声だけは）もはや当たり前のこととなり、世界がフラット化\*3する中、「場」や「地域」の固有性は、むしろますますクローズアップされてきている。日本のみならず、世界中の地域が、後述する「地域ブランド」構築の要請のもとに、「地域性」を創り出すことを半ば強制されている、ともいえる\*4。

……という事情を背景に、本稿では、文学を「地域性」によって読み込む手法である地域文学研究について考え、そこから文学研究と〈場〉との関係はいかなるものなのか（いかなるものであるべきか）について、考察する\*5。

## 一 中国における「地域」と「文学」

まずは、中国の現代文学において、「地域」と「文学研究」がどのような関係にあったのかを概観する\*6。

近現代中国文学研究では長らく、個別の地域に着目することは少なかったといえる\*7。重要だとされたのは何よりも作品内部に存在するとされ、あるいは作者の内面が投影されているとされた、「イデオロギー（的なもの）」であった。地域的な要素がテーマになるとしても、それは「都市」「農村」という大きな括りでのものだった。もちろん、「東北作家群」と呼ばれる作家たち、あるいは「沈従文と湘西」のように特定の地域との結びつきから論じられてきた作家もいるが、それはやはり少数であって、個別の地域の「地域性」という観点、文学研究においてはほとんど顧みられることはなかったといえるだろう。

文学が個別の地域に関連づけて（今ふうにいえば「タグづけ」されて）論じられるようになったのは、おもに1990年代に入ってからだが、その嚆矢とされるのが、趙園『北京：城与人』\*8である。蘭州生まれの著者が「北京と／の文学」を論じた同書は大きな反響を呼び、今に至るまでこの分野において影響力を有している。

同書の冒頭で、著者はこう述べる。

どの都市も、深く厚い歴史的な背景それ自体が精神的な品格を擁しているものだが、居住し、あるいは通り過ぎる人にすら、形はないが重要な影響を与える、それが北京である。北京はそのような都市であり、人々に強烈な文化的吸引力——それは混然一体としていて分析できずまた描写するのも難しい、「情緒」「気分」などの漠然とした感情——を溢れんばかりに感じさせるのである。(p. 1)

著者自身が「描写するのも難しい、「情緒」「気分」と述べる北京の「地域性」は、そのことば通り、実体を伴ったものとはいえない。しかし、こうした「情緒」や「気分」にすぎない(とひとまず置いておく)「地域性」によって文学を論じることが「有り」なのだというメタメッセージを、同書は発したといえる。以後堰を切ったように、「地域性」をもとに論じる文学研究が次々に発表されていったのである。

「地域文学研究」の先鞭をつけたのは北京であるが、その後、90年代中盤以降のこの領域においては、上海の存在感が圧倒的であった\*9。同じ時期、中国では上海を中心として経済発展が急速に進んでいくが、それと歩調を合わせるかのように「老上海(オールド・シャンハイ)」ブームが湧き起こった。1930年代の租界を中心とした華やかな「半植民地」文化(といわれるもの)が、書籍や写真集、あるいは絵葉書などとして、大量に生産され、消費されるようになったのである。私は1997年9月から99年6月まで上海で留学生生活を送ったが、続々と出版される「老上海」本を最初は律儀に全部買い揃えていたが、とても追いつかないと気づき、途中で諦めた記憶がある。

文学研究においても、「上海、文学研究」と銘打ったものが徐々に出るようになった。同じく留学中に『上海文学史』\*10が出版された時、中国人の先生が授業で「この本は画期的な成果だ」と誇らしげに語っていたのを思い出す。とはいえ当時の私は、「地域を限定した文学史に、はたしてどんな意味があるのだろう」と、やや奇異に感じていたのだが。

2000年代になると、地域文学研究の波が全国に広がっていった。その流れを作ったものの一つは、陳平原主編「都市想像与文化記憶」シリーズである。北京を皮切りに西安\*11、開封\*12、香港\*13と出版された同シリーズは、地域文学研究にはずみをつけた。以降、全国各地の「ご当地文学」の研究書や文学史が続々と出版されていったのである。

それらの地域文学研究は、論じ方がパターン化されている。まず、とくに「都市」と銘打つ場合、研究の大きな枠組みとして Lichard Lehan の *The City in Literature*\*14 を挙げ、続けて中国におけるこの領域の嚆矢として趙園『北京』、

そして後述する呉福輝『都市漩流中的海派小説』\*15 を挙げる。続いて Leo Ou-fan Lee (李欧梵) の *Shanghai Modern*\*16 や李今『海派小説与現代都市文化』\*17、さらに Yingjin Zhang (張英進) の *The City in Modern Chinese Literature and Film*\*18 などを先行研究として挙げていき、その延長線上に自らの研究を位置づけつつ、「しかし我が街〇〇における文学はほとんど研究されてこなかった」として自らの研究の意義を掲げる。そして当地の「地域性」とされるものをいくつか規定した上で、「地域性が表れている作家・小説」を列挙していく、というものである。閔立飛『城市的文学書写——天津文学与都市文化』\*19はまさにこのパターン通りに書かれたものであり、「導言」において上記の先行研究を一通り挙げた上で、「しかし、文学の都市研究が上海と北京の二都市に集中し、天津は意識的にか無意識的にか遮断され無視されている、という事実に対し、本書は天津現当代文学と都市天津の問題を提出し、文学の都市研究を近現代において重要な位置を占め、影響を有する天津に応用し、文学の角度から天津の歴史と文化の構成を検討、描写することを意図している」と語っている。

こうして地域文学研究はその対象を中国全土に広げていったが、そこでもやはり、「地域性が作家・作品に影響を与えた」とする視点は共通している。

[...] 地域とは物質と精神の融合した空間であり、中原というこの特殊な地域は特殊な中原の風情や心情を育み、また特殊な中原の精神気質を生み出した。河南作家が中原文化の影響を深く受けていることはいうまでもなく、中原の大地の山河の地形、風土や人情であれ、あるいは人文思想、政治制度、民間戯曲であれ、みな特殊な文化記憶として彼らの頭に深く刻まれ、また彼らの創作に投影されているのだ\*20。

地域文化の集団として、陝西作家たちは濃厚な本土文化の色彩を帯びるが、60年あまりの発展の歴史を概観するに、中国当代文学の重要な問題と重要な文化現象、政治状況、理性的精神、伝統文化の内情、商業的傾向、西部の多元文化、そして農民の題材等を含むしており、これら多元的な文化因子が一つに交わって、総合されて陝西作家たちの文化的特徴を構築している\*21。

実際、各都市はみな独自の特色、文字によって長期保存することができるものを多く有している。中山は、溢れんばかりの魂を有する都市である——狭い歩行街の小道であっても、心地よい紫馬嶺公園であっても、青々とした五桂山や曲がりくねった岐江河であっても……「魂」は街中を貫いており、それが墨と筆に形を変え、最後は文字に捕捉されるのである\*22。

このように、「地域性」と「文学の特徴」が渾然一体となった、「情緒」や「気分」としての文学研究記述が広く流通するようになっていったのである。

次章では、地域文学研究の本家ともいえる上海について、さらに詳しく見ていく。

## 二 「上海」文学とは？

前章で述べたように、「上海文学研究」という枠組みは1990年代後半から一気に浸透するが、その背景にあるのは、繰り返すように「上海の経済発展」ということになるのだろう。他地域に比しての飛び抜けた経済発展は、上海人の自尊心を大いに満足させた。そしてその経済発展を「自力」で成し遂げたという自信は、「戦前の発展はしょせんは外国の力により成し遂げたものである」という「やましき」から人々を解放させることにもなり、「老上海」の華々しさが堂々と語られるようになったのである\*23。

文学において、「老上海」の象徴とされたのが、新感覚派であった。中国現代文学研究では長らく忘れられた存在であったが、1985年の敵家炎『新感覚派小説選』\*24によって「発見」された。そして呉福輝『都市漩流中的海派小説』において初めて包括的な分析がなされ、新感覚派の評価が定まった。以降、同書が「経典」となって、これに依拠した研究が大量に発表されていったのである。

新感覚派が論じられる際には、必ずといっていいほど、上海という都市の特徴、すなわち「半植民地」「消費社会」等が読みの「根拠」とされてきた。例えば近年出版された張勇『摩登主義』\*25ではこう述べられている。

海派文学と都市の物質文化・消費文化の関係は、海派文学の研究において避けることのできない問題である。近年、この領域においては多くの重要で代表的な著作が著され、例えば呉福輝先生『都市漩流中的海派小説』、李今『海派小説与現代都市文化』、李欧凡先生『上海モダン』等である。これらの著作は上海社会、歴史、経済の方面の研究成果を借り、広い視野から海派文学を産んだ都市文化言説、とりわけそれとオールド上海の「モダン」な物質文化、消費文化との間の関係を分析したもので、海派文学におけるメルクマールとなった。(p. 1)

この中に典型的に表れているように、(新感覚派をその中に含有する)海派文学において、上海という都市の特性は「避けることのできない」ものであるとされている\*26。

上海文学研究には、文学を上海の「心態文化」を研究する材料にしようというものや\*27、あるいは後述するように「市井の人々の生き生きとした生活ぶり」を浮かび上がらせていると評価するもの\*28など、いくつかのバリエーションがあるが、どれも「上海の地域性（とされるもの）」が「上海文学」に影響を与えたのだ、という前提を共有している。そもそも「経典」である『都市漩流中的海派小説』で、「海派小説本体は現代消費文化の一分子であり、同時に、それは上海消費文化を大きな背景として強固に根づいている」（p. 1）と述べられているのだが、これ以降の研究においては、海派小説の「背景」には「上海（消費）文化」が強固に根づいているのだ、という前提が「強固に根づいている」のであった。

ここでいわれる「大衆消費社会」にしる「半植民地」にしる、少なくとも中国が建て前として信奉している（ことになっている）マルクス主義的世界観からすると、両方とも敵であり、賞賛するようなものではないはずである。しかし1990年代中盤以降、上海は経済発展にあわせ、むしろ積極的にこれら「老上海」イメージを利用し、マーケティングを行い、自らを売り出していった。そこでは、「老上海」時代の「グローバル（＝半植民地）」イメージを、世界的な大都市として発展を遂げていくであろうこれからの都市イメージに重ね合わせ、両者を一体化させた形での「上海イメージ」を打ち出していったのである\*29。

地域が自らを売り出すために創造するイメージは、「地域ブランド」（中国語で「区域品牌」）といわれている\*30。「はじめに」でも述べたように、ツーリズムの発達、そして市場のグローバル化等により、20世紀終盤から、地域（産地）の差別化の必要性が急速に高まってきた。どこにでもある場所・モノではダメであり、それぞれの地域が他地域との差異化を図り、「ここにしかないモノ・コト」を売り出すことが要求され、そのために「場の固有性」を打ち出す必要があるとされたのである。中国においても、地域ブランドの構築への注目はますます高まりをみせている\*31。

上海は「老上海」のイメージを再構築し、経済発展を遂げようとしている現在の姿にそれを繋げる形で、自らの地域ブランド構築を図ってきた。そしてそれは大成功を収めたといっていいただろう。現在に至るまで、中華民国期のイメージとして「老上海」は圧倒的な存在感を示しており、それ以外の都市を大きく引き離す。そしてその圧倒的なプレゼンスがさらに人々を惹きつけ、「上海語り」を促していくのである。上海文学研究も、こうした都市プロモーションに乗っかりながら、もしくは都市プロモーションに利用される形で、進められてきたといっていいただろう。そこでは、文学作品も「地域性」を構成する一要素として、いわば「地域性」に従属する形で、研究が行われてきたのである。

「従属」というやや強い言葉を使ったのは、それらの研究においては、まずは「地域性」があり、作品はそれに影響を受けたもの、またはそれを表現したものである、という図式が前提とされているからである。上海文学研究においては、「上海がいかに特殊な都市であったか」を歴史資料や統計データを駆使して説明した上で、その「特殊性」が文学にどのように投影・反映されているかを検討する、というスタイルがほとんどである。

こうした研究スタイルに見るべきものがまったくないとはいわない。が、これらはいくつかの欠点を有しているように、私には思われる。その欠点とは、以下の通りである。

- ・作家たちが試みたさまざまな手法を「上海の地域性に影響されたのだ」と矮小化してしまう危険性
- ・「地域性」を所与のものとする文化本質主義性\*32
- ・「文化的背景」に影響を受けて文学が生み出される、という単純な反映論に陥る可能性

これらはどれも、簡単には見逃せない欠点だと思われる。しかしこうした欠点がとくに自省されるわけでもなく、同工異曲の上海文学研究が量産され続けている。

その背景には、上海という都市、そして上海文学研究という〈場〉の「居心地のよさ」があるのだろう。「イデオロギー」による文学研究、すなわち「思想的な正しさ」や「誤り」を規定し、それによって作家・作品を褒めたり貶したりするタイプの研究は、研究者が「正しい／誤り」の判断を下す審判の役目を担わねばならず、しかもそれはそのまま自らの「正しさ／誤り」が問われるということでもある。そこでは、「自らの正しさ」をつねに主張し続けるという多大な努力を強いられる。一方「上海文学研究」であれば、上海という「居場所」はつねに確保されている。その居場所は「中立」であり、「正しさ／誤り」などといった要素が介入する余地はない。上海という〈場〉さえ共有すればそれだけでよく、「参入」も実に容易である。事実、上海文学研究で語られるのは、「上海出身の作家の作品」「上海を描いた作品」「上海で書かれた作品」が雑居する、バラバラなものなのである（これは他地域の「地域文学研究」でも同様である）。こうした「(上海に少しでも関係があれば) なんでもあり」の寛容さ・緩さが、上海文学研究という〈場〉を非常に魅力的なものにしたと思われる\*33。

繰り返すが、「だからこうした研究に意味はない」といいたいわけではない。「完全無欠の研究スタイル」が（おそらく）存在しない以上、自らの欠点を自覚し

ながらも、「ひとまず」その手法で研究を行うことを批判しては、研究を進めることなどできない。

しかし私には、上海文学研究、そして地域文学研究が、その「居心地の良さ」に甘え、自らを相対化する力を失っているように感じられるのである。上海、北京……という「居場所」があることは、ある種の安心感をもたらすことは、想像に難くない。私も上海文学研究者の端くれとして、その「居心地の良さ」は感じてきた。しかし「上海の資料を使って上海の文学を論じる」ということの「出口のなさ」もしくは「トートロジー性」に、息苦しさを感ずるようにもなった。これをいくら続けたところで、「老上海」という「大きな物語」の中のごく一点となるだけではないか？ 「独自性」のかけらもないのではないかと。

そしてそれは、「中国」文学を論じることの困難さにもつながる。話が大きくなってきたが、次章では「文学研究とは何を明らかにするものなのか」について、検討したい。

### 三 文学研究とは何か？

世にあるすべての研究領域は、「理論研究」と「地域研究」（呼称はどちらも「仮」であり、一般に流通しているものではない）の2つにわけられる\*34。「理論研究」は、事象を理論化し、一般化を目指すものであり、多くの理系、理論経済学、心理学、政治学などがこれに該当する。一方の「地域研究」は「その地域固有の事象」を析出することを目指すものであり、民俗学や文化人類学、そして社会学などが挙げられる。

この両者は前提において対立する。理論研究があくまで「地球上すべての地域で起こる事象は根源的には同じ」という前提を有するのに対し、後者は「それぞれの地域で違う」ことを前提とする。「日本に存在するiPS細胞の特徴」などといった定義は無意味であるし、一方で「親族関係は全世界共通である」という命題が乱暴であることも、また確かである\*35。

文学についてはこれまで、この二分類でいけば、「理論研究」に分類されるものだったといえるのではないかと。もちろん、その中身は理系の研究とはまったく異なるものではあるが、「人類は時代や場所を越えて同じ思いを持つものだ」という前提は、おそらく共有していた。文学とは作品中に込められた「イデオロギー」により分析されるべき／はずのものであり、かつその「イデオロギー」はどの時代・どの地域にも当てはまるものである、という前提があった。例えば「作者の考え」を元に作品分析を行う時、どの時代・地域の者の「考え」であっても、読解を行う我々にとって理解可能である、という前提に立っていた。魯迅の文学を「留学先で屈辱的な経験をした」「教え子が殺された」などの経験によって分

析する際には、「魯迅が紹興生まれだから」こう考えた、ということではなく、人間であれば誰もが同じように感じるはずだ、という前提を有していたのである\*36。

しかし地域文学研究の登場は、文学研究においては大きな転換点であったといえるだろう。それは「人間誰しも、同じように考える」という前提を覆す。「主人公がこういう行動を取るのは、作者である魯迅が紹興生まれだからである」が結論となるのである。紹興の「地域性」を規定し、「魯迅の作品にはその地域性が現れている」とするのが、地域文学研究のスタンダードなのである。

地域文学研究という枠組みがいかんにして生まれたのかについては、張鴻声の意見が参考になる\*37。彼は上海文学研究を三つの時期に分ける。まず「海派」「新感覚派」などの枠組みで分析する流派研究が現れ、続いて社団やメディア、あるいは公共領域・市民社会などの観点からの研究が盛んになり、そして歴史学や社会学の知見を使った文学研究が主流になってきている、とする。これは言葉を変えれば、「文学研究が他領域の研究成果を使いだした」ということになるだろうし、さらに言葉を変えれば「学際化してきた」ともいえるのかもしれない。近年では档案資料を駆使する研究、あるいは「文学以外」のさまざまな理論を使用した研究も珍しくはなくなり、そういった意味では文学研究が「進化」してきたともいえる。

しかし一方、そうした「進化」は、「文学研究の固有性」を失わせるという副作用も生み出した。档案資料等を用いて当時の歴史的な状況を明らかにし、そこから作品を分析する、という研究を発表したら、「これは、歴史研究じゃないのか」「文学研究じゃないじゃないか」と（年配の先生に）苦々しげにいわれた、という経験を持つ人は（私を含めて）多いのではないだろうか。もちろん、そこで「文学／歴史などといった「縄張り」にこだわることに意味はない」と反論することは可能だし、わたし自身もおおむねこういつてきた。しかし一方で、「たしかに、こういう研究は「文学研究」ではないのかもしれない」という思いも、心の中にあっただ。

文学研究が「進化」するとは、社会学や歴史や心理学の「他領域」から知見を移入し、それを作品に応用して「この作品はこの理論に当てはまる」と結論づけることなのか。こうした疑問は文学研究の「宿命」ともいえるものであるし、これまでも多くの文学研究者がこのジレンマに頭を悩ませてきた\*38。しかし、とくに議論が深まる様子もなく、研究の根幹を「他領域」に依存する傾向はますます強まっているように思える。

ここに「文学研究の地域化」が広まる理由の一端があっただといえよう。档案などの歴史資料（もしくはそれを用いた歴史研究の成果）を使い、「その地域固

有の事例」から文学作品を読み解く研究は、その性質上、「地域化」が避けられない\*39。上海の档案資料を使って「上海の地域性」を浮かび上がらせ、「ゆえに上海の文学にはこういう特色がある」という研究スタイルは、「文学研究の地域化」傾向を後押しするものなのである。

さらに、2000年代前半において、欧米や日本においてハーバーマスの〈公共圏〉(public sphere)、そしてブルデューの〈文学場〉(literary field) などへの注目が集まったことも背景にあったと思われる\*40。これらはともに〈場〉を重視する概念であり、「何が語られたか」よりも「どこで語られたか」に着目する思想様式であるといえる。そして中国現代文学研究においてこの2つの概念が文学研究に導入された時、俎上にあげられたのは、「西洋化された」上海であり、あるいは知識人が集合していた北京であった。その後、〈場〉の概念は、日本では一時期「インターネット空間」への応用などで盛んに用いられたあと、現在でも社会科学系の領域で依然影響力を持つものの\*41、人文系領域では目にすることは少なくなった。が、中国では文学研究に「居場所」を見出し、影響を(やや形を変えて)与えていったのである\*42。さらに「下から」の文学叙述が可能になる、というのも、地域文学研究を魅力的なものにした理由の一つであろう。「特殊な才能を持った文学者が素晴らしい思想が込められた作品を書いた」「ゆえに我々もこの文学者に学ばねばならない」という「啓蒙のための文学研究」に代わって、「この土地に生きる普通の人間がこの土地に生きる普通の人間を描いた」というストーリーが、受け入れられていったのである\*43。そこでは「一読してもわからない作者の意図を、研究者が知見を駆使して解説する」ような研究は、もはや目指されない。「市井の人々の生き生きとした生活ぶり」をそのまま描いた小説をできるだけ広く網羅的に集めるという「力業」が、研究スタイルとなる。実際、地域文学研究では、著名作家であろうが無名作家であろうが、同一線上に並べて論じるものがほとんどである。そこでは「作家の技巧」や「意図」が問題にされることはほとんどなく、「地域性」が文学中に表れているかどうかだけが重要とされる。

繰り返すが、こうした「力業」の地域文学研究、「魯迅は紹興生まれだからこういう小説を書いた」「穆時英は上海で生まれ育ったからこういう小説を書いた」という研究が、ダメといたいわけではない。「どこの出身だからこういう小説を書いた」というのは、体感的には納得できる部分もある。しかし、では「魯迅が中国人だから」ではどうか？「魯迅の小説には、中国人らしい気質が表れている」という研究は、「有り」だろうか？これには異を唱える人が多いだろう。しかし、いうまでもなく、「紹興人だから」「上海人だから」と「中国人だから」には、本質的な違いはない。

現在、世に流通する中国論は、中国の「外部」からのものであっても「内部」からのものであっても、「中国特殊論」に完全に占有されているといいいい。そこでは「中国（人）はいかに「我々」と違うか」もしくは「「我々中国人」はいかに「彼ら」と違うか」が、さまざまな事象を元に語られ続けている。特殊論がさらなる特殊論を生み、もはや「我々」と「彼ら」の間は遠く隔たってしまう、しかもその距離は日に日に広がっているように思える。

もちろん、地域文学研究がすぐにそのまま「中国特殊論」につながる、というわけではないだろう。その間にはまだ、何重かのクッションは置かれている。しかし、この両者が同じ「狙い」もしくは「流れ」のもとに進められていることも、また事実であろう。すなわち、〈場〉による「大きな物語」にすべてを回収してしまおう、という強引かつ乱暴な狙い・流れである。そして日本の「地域活性化」が「地域」をうたいながらも、結局のところ「地域」の「中央」への奉仕を強要されているのと同様、中国の地域文学研究も、ナショナルリズムを相対化するというよりは、明らかにナショナルリズムを補完する方向へと向かっている\*44。「地域」なり「国家」なりの〈場〉を絶対視する声が共鳴し合い、「この〈場〉にいる者であれば、このようであるはずなのだ」という異論を許さぬ「物語（メタメッセージ）」となって、圧倒的な物量で我々を覆い尽くそうとしているように、私には思われる。

こうした「〈場〉の物語」の奔流にあって、文学研究にできることは、なんなのか。我々は「中国」文学を研究しているのか。そうだとすれば、それは結局は「中国特殊論」へと向かわざるをえないのか。そもそも文学を研究して、なにが明らかになるのか。穆時英の小説を研究してわかることは、「当時の上海の社会状況」なのか、「穆時英という人間の当時の精神状態」なのか、それとも「上海人／中国人の性質」なのか。

話がますますとりとめなくなってきたが、私の考える「ではどうすればいいのか」を次に述べて稿を終えることにする。

### おわりに——文学研究の居場所——

本稿では、他人の研究の批判ばかり行ってきた。

とはいえ何度も繰り返しているように、「地域文学研究などというものをすべきではない」と主張したいわけではない。文学作品の読みは多様であるべきなのはいうまでもなく、方法論的に「こちらのほうがより正しい」というものがあるわけでもない。

しかし、文学研究の「進化」とともに、「今／ここ」から遠ざかっていってしまっていると感じられるのも、またたしかなのである。これは授業において、い

つも痛感させられていることである。

たとえば新感覚派の文学を授業で講じる時。読解の前提として「1930年代上海の特殊性」を説明すると、その時点で多くの受講生が興味を失うのがわかる。そして授業後に書いてもらったコメントを見ると、「昔の上海という街は他とは違っていたということがわかった」「昔の中国はたいへんだったということがわかった」という「他人事」の感想が量産されるのである。ここで「今の学生は学ぶ意欲がまったくない」と嘆いたり怒ったりすることも、可能である。が、「1930年代の上海という都市とその文学が、他地域に比べていかに特殊か」を力説したところで、上海どころか中国に対しても多くの知識を有していない（もちろん、これは貶めているわけではない。有していないからこそ勉強する意味があるのである）一般的な学生の興味は惹かないであろうことも、よくわかる。

〈場〉とは、往々にして、「我々」と「彼ら」とを分けるツールにもなってしまふのである\*45。もちろん、誰もが参入・退出できるオープンな〈場〉というのもありうるだろうし、そうした〈場〉づくりを目指すべきだ、とはいえる\*46。しかし「地域ブランド」構築の「マニュアル」が「他との“違い”を打ち出せ」と繰り返す主張するように、そこではあくまで、「“他地域とは違う”、自分たち」というイメージを含意せずにはいられない。そこには最初から、「我々／彼ら」という二分法が組み込まれている。

ゆえに「中国」文学や「上海」文学についていくら事細かに説明しようが、「彼ら」の多くが魅力を感じないのは、当然といえば当然である。「1930年代の上海という奇形な発展を遂げた都市」を描いた小説についていくら力説しても、時間的にも地理的にも遠く隔たった人間が、それを我がことのように考えるのは、難しい\*47。それはあたかも、中国の指導者がいくら熱心に「中国夢」を説こうが、「(私も含めた) 中国人以外＝彼ら」の多くはそれを聞いても白けるだけであるのと、同じである。

歴史研究は、上でも述べたように、その性質上、「時間」と「場所」が厳密に規定されている。「いつ」「どこ」を分析するのか、それを決めないと、研究は始まらない。もちろん、ある時点・ある場所におけるできごとから人間普遍の真理を見つけ出す、ということも可能だろうし、歴史学が究極的に目指すのはそこなのだろう。しかしそれは相当あとの話であって、やはり「個別の事例」を前提とせずにはいられない。

しかし文学研究は、本来、そうした「個別の事例」を無化できる（はずである）。千年以上前に生き、作品を書いた李白を、(時代背景や生い立ちをカッコに入れつつ) 昨夜一緒に飲んだ友人であるかのように想い、論じることができるのが、特権なのである\*48。

私は最近の演習の授業では、ある作品を題材に、「これがいつ書かれたとか、どこで書かれたとか、そういう情報は一切考慮せず、今の自分の眼で見て、この作品の主人公、そして登場人物についてどう思うか、自由に分析してこい」という課題を設定している。「当時の時代背景を調べる」という「お約束」を踏ませると、ネット記事のコピペでレジュメを作った挙げ句、「今の自分には関係ない物語である」というマインドセットがなされ、「昔／今の中国はたいへんだということがわかった」という結論の発表が連発されることになる。ゆえに、作品や登場人物を「今の自分」と重ね合わせられるよう誘導することに、神経を使っている（もちろん、このやり方に異議がある方もろうし、私も改良の余地はあると思っている）。

というわけで本稿の結論としては、「自らの立ち位置の偶然性（反本質主義的性格）を自覚しつつ、宗教や人種などの伝統的な差異よりも、苦痛や辱めという感情の類似に拠り所を置く」ような研究をしよう、というものになる。そしてこれは、私が穆時英の小説を題材にして14年前に書いた論文\*49の結論と同じである。「14年間何も変わっていないじゃないか」という叱責は受け止めるとして、「我々」と「彼ら」に分断され、その溝が深まる一方である現代社会でこそ、「〈場〉の共有よりも、感情の類似＝共感に重点を置く文学研究」を提唱する意味はあると思う。その「共感」とは、「1930年代の上海に生きた穆時英」への共感でもあり、「現代の日本に生きる若者」への共感でもあり、「ネットで中国人排斥を煽り続けるネトウヨ」への共感でもあり、「大学には人文系など必要ない」とした顔で宣う人々への共感でもある。そしてこれらバラバラな〈場〉に置かれている彼らの溝を少しでも埋め、修復していく、そこにこそ文学研究の「居場所」はあるのではないか。

それを前提としていけば、档案資料を使って上海文学を研究しようが、文学を地域活性化につなげようが、かまわない。大事なのは、「〈場〉＝立ち位置」を相対化すること、すなわち「脱・場所」である。

---

\*1 *Selling Places* というタイトルの本は二つ出ている（Kearns and Philo eds., *Selling Places: The City as Cultural Capital, Past and Present*, Pergamon, 1993、Stephen Ward, *Selling Places: The Marketing and Promotion of Towns and Cities 1850-2000*, Routledge, 1998）。ともにやや昔のものだが、本稿執筆においてたいへん参考になった。

\*2 飯田泰之他『地域再生の失敗学』（光文社新書、2016）では、ゆるキャラやB級グルメなど、地域活性化をうたう多くの企画が横並びであり、日本中どここの地域でも同じこと

が行われている点を批判している。

なお、地域性の「創出」について、観光（ツーリズム）の視点から分析したものに橋本和也『観光経験の人類学——みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる——』（世界思想社、2011）のとくに第三章「構築される「地域文化観光」」があり、本稿執筆において大いに啓発を受けた。が、同書は、基本的には「地域性の創出」を「（地域活性化のために）好ましいこと」として扱っており、本稿とは方向性が異なる。

- \*3 トーマス・フリードマン『フラット化する世界』（伏見威蕃訳、日本経済新聞社、2006）。
- \*4 「場の固有性」が重視されることについては、ツーリズムの影響が大きいいえる。本稿ではこのテーマには踏み込まないが、ジョン・アーリの一連の著作（『場所を消費する』吉原直樹他訳、法政大学出版局、2012、『観光のまなざし』（ヨナス・ラースンらとの共著、加太宏邦訳、法政大学出版局、2014）に、その関連性が述べられている。また山田良治「観光研究における理論的諸問題——社会経済学的アプローチ——」（『経済理論』367、2012）には、この両者の関係性が的確にまとめられている。
- \*5 文学における〈場〉ということだと、環境文学というジャンルが挙げられる。そこでは、「ローカルな特性を帯びた言葉の意義に切り込んでゆくことにこそ、環境文学研究の醍醐味があるとは言えないでしょうか。[中略] 環境文学には、関係性という意味において、〈場所〉の文学だとみなしてさしつかえない要素が確実に秘められているからです。さらに、そのような営みを通じて東アジアの言語表象の再検証あるいは相対化を試みる時、見逃されがちであった〈場所〉の特性が露わになることも期待されます。」（生田省悟「〈エコ〉が語りかけること」生田他編『「場所」の詩学——環境文学とは何か』藤原書店、2008所収）と、文学を〈場〉で読むことが提唱されている。本稿では紙幅の関係で環境文学には踏み込まないが、注目すべき研究手法であることは間違いない。
- \*6 本章の記述は『野草』100号に掲載予定の拙稿『深圳文学に読む物語——文学を都市から救い出す？——』と重なる部分があるが、本稿は上海文学を中心に扱うものであり、内容が異なる。諒とされたい。
- \*7 張鴻声によれば、1950～70年代においては、上海の地域性を感じさせる小説は一掃されたという（『都市現代性的の另一種表述——中国当代城市文学研究（1949-1976）』北京大学出版社、2014）p.79。
- \*8 上海人民出版社、1991。本稿では2002年出版の北京大学出版社版を用いる。
- \*9 陳平原も2005年の時点で、「今後発展する潜在力が大いにある「北京学」も、目下のところ「上海学」の輝きには遠く及ばない」と述べている（陳平原・王徳威編『北京：都市想像与文化記憶』北京大学出版社、2005「序 北京記憶与記憶北京」）。
- \*10 王文英主編『上海文学史』（上海人民出版社、1999）。
- \*11 陳平原・王徳威・陳学超編『西安：都市想像与文化記憶』（北京大学出版社、2009）。
- \*12 陳平原・王徳威・関愛和編『開封：都市想像与文化記憶』（北京大学出版社、2013）。
- \*13 陳平原・陳国球・王徳威編『香港：都市想像与文化記憶』（北京大学出版社、2015）。
- \*14 Lichard Lehan, *The City in Literature: An Intellectual and Cultural History*, University of California Press, 1998. 中国語訳は理查德・利罕『文学中的的城市』（呉子楓訳、上海人民出版社、2009）。
- \*15 湖南教育出版社、1995。
- \*16 Leo Ou-fan Lee, *Shanghai Modern, The Flowering of a New Urban Culture in China*,

- 1930-1945, Harvard University Press, 1999. 中国語訳は『上海摩登— 一種新都市文化在中國1930-1945』(毛尖訳、北京大学出版社、2001)。
- \*17 安徽教育出版社、2000。
- \*18 *The City in Modern Chinese Literature and Film, Configurations of Space, Time and Gender*, Stanford University Press, 1996. 中国語訳は『中国現代文学と電影中的城市—空間、時間と性別構形』(秦彦彦訳、江蘇人民出版社、2007)。
- \*19 天津社会科学院出版社、2016。
- \*20 吕晓潔、李炎超『中原文化視閥下的河南当代郷土小説研究』(中国社会科学出版社、2015) p.1。
- \*21 劉寧『当代陝西作家与秦地伝統文化研究 —— 以柳青、陳忠実和賈平凹为中心』(中国社会科学出版社、2014) p.7。
- \*22 阮波「文学中的中山形象——兼論当代中山文学精神的構築与延伸」(申群喜・梁文生主編『人文香山書系 空間・人物・形象』江西人民出版社、2013所収)。
- \*23 前掲張鴻声『城市現代性的另一種表述』p. 12。
- \*24 人民文学出版社、1985。
- \*25 中国社会科学出版社、2015。
- \*26 これについては、「海派」とはそもそも「上海の地域性に影響を受けた作家たち」という意味を込めて呼ばれる名称であるので、「海派は上海の地域性に影響を受けている」という説明はトートロジーではある。  
また、「海派」と「新感覚派」、そして「摩登主義(モダニズム)」はいうまでもなくそれぞれ異なるカテゴリーであるが、同書内、そして多くの上海文学研究においても、とくに区別なく混在している場合が多い。上海文学研究の「雑居性」を体現しているといえる。
- \*27 呉俊范『上海文学』小説与城市文化心態の真実(孫遜等主編『書写城市：文学与城市体験』上海三聯書店、2014所収)。
- \*28 前掲張鴻声『城市現代性的另一種表述』p. 1。
- \*29 張鴻声前掲『城市現代性的另一種表述』pp.12-13。
- \*30 地域ブランドについては、主に日本の事例を分析したものだが、初谷勇『地域ブランド政策論』(日本評論社、2017)、小林哲『地域ブランディングの論理——食文化資源を活用した地域多様性の創出』(有斐閣、2016)等を参照。中国の地域ブランドについては、温州を扱った西口敏宏・辻田素子『コミュニティー・キャピタル——中国・温州企業家ネットワークの繁榮と限界』(有斐閣、2016)が触れている。
- \*31 CNKIにて「区域品牌」を検索すると7,157件がヒットするが(2018年3月10日アクセス)、とくに2004年ごろからその数が急激に増えていることがわかる。  
一方、足立啓二『専制国家史論——中国史から世界史へ』(ちくま学芸文庫、2018)によれば、中国は伝統的に「地域の特産品」が育ちにくかったという。その要因として、経営・生産などあらゆる局面において参入と退出が容易だったこと、また当地を治める地方官が短期間で異動を繰り返すため、長期における指導や監督が行われにくかったことなどを挙げている(pp.207-208)。
- \*32 文化本質主義については、長谷川典子「文化本質主義に関する一考察——異文化コミュニケーション研究の視点から——」(『北星学園大学文学部北星論集』54-2、2017)がこれまでの議論を的確にまとめている。

文化本質主義に対抗するものとしては文化構築主義が挙げられようが、中国研究において「地域性」の構築主義的性格に言及しているものは、管見の限りでは多くない。程美宝が「広東文化」について（『地域文化与国家認同：晚清以来「広東文化」觀的形成』三聯書店、2006）、デ・フォルジェ（Des Forges）が「北京文化」について（「北京は上海の産品嗎？」前掲陳平原編『北京』所収）、それぞれ指摘している程度である。程美宝の研究は「広東文化」なるものがいかに析出されてきたかを論じるきわめて貴重な業績であるが、これに続くものは現れず、近年発表される「地域文学研究」では、「地域には元々その土地固有の文化がある」という本質主義が当然の前提として語られている。

- \*33 以上は、私が上海文学研究に「参入」した時の心境を記したものである。他の研究者も全員こういう心境である、というわけではない。
- \*34 研究領域におけるこの2つの枠組みについては、保城広至『歴史から理論を創造する方法——社会科学と歴史学を統合する——』（勁草書房、2015）を参照。
- \*35 私が勤務するのは「理論研究」と「地域研究」が混在する学部だが、修士論文発表会などで私の指導院生が「中国における〇〇」を発表すると、理論研究の研究者に「でもそれは、「中国だから」というわけではないですよ？」と指摘されることがしばしばある。両者の関係性の難しさを痛感させられる。
- \*36 この点については、拙稿「與那覇潤『中国化する日本——日中「文明の衝突」一千年史』書評」（『中国文芸研究会会報』364、365合併号、2012年3月）を参照されたい。
- \*37 前掲『城市現代性的の另一種表述』p. 1。
- \*38 テリー・イーグルトン『文学とは何か——現代批評理論への招待——』（大橋洋一訳、岩波書店、1985）は、こうした疑問を延々と記す著といえる。また近年では、菅原克也『小説のしくみ——近代文学の「語り」と物語分析』（東京大学出版会、2017）の「あとがき」にて、著者がこうした思いを綴っている。
- \*39 歴史学における「個別性」については、前掲保城広至『歴史から理論を創造する方法——社会科学と歴史学を統合する——』において、副題通り「（普遍的理論化を目指す）社会科学」と「（個別の事例の記述を主とする）歴史」との比較において、詳細に論じられている。
- \*40 前者については村井寛志「兩大戦間期の中国におけるメディア論のポリティクス——公共圏概念をめぐる両義性を手がかりに」（『思想』957、2004-1）が、後者については拙稿「20世紀中国「文学場」のメカニズム——Michel Hockx, *The Literary Field of Twentieth-Century China* 書評」（『東方』235、2000-9）が、当時の雰囲気伝えてる。
- \*41 この方面で大きな影響力を持つ著作に、伊丹敬之『場の論理とマネジメント』（東洋経済新報社、2005）がある。その内容はグループワーク等の技術に応用され、広く浸透している。
- \*42 現在の「地域文学研究」においても、〈場〉の概念を強調したものが見られる。「我々は文学を「文化空間」の中、すなわち「文化場」に置き、重慶文化が文学をいかに育んだかを考察する」（尹瑩『小説中の重慶——国統区小説研究の一個視角』華中科技大学出版社、2014、p.26）等。
- \*43 これについて、前掲張鴻声『城市現代性的の另一種表述』では「日常性叙述」（p. 1）、前掲李今『海派小説与現代都市文化』では「日常生活意識」（p.229）ということばで説明されている。
- なお本稿でしばしば引用してきた張鴻声の同書は、冒頭の概論部分では極めて的確、か

つ客観的に「上海文学研究」の問題点を指摘しているが、各論部分は問題点として指摘したはずの「よくある上海文学研究」となっている。

- \*44 「私は今、海派と京派〔という区別〕を解消する必要があるとは思わない。むしろ、中国の地域文化がそれぞれ独自に発展し、それらが不断に自分たちの文化の現代的な品質を点検し、引っ張り、浸透させ、内部の矛盾や衝突を起し、海派の存在を含めて各種の衝突に挑むべきだとすら思う。このようにしてこそ、中国文化・中国文学は現代的な「書き換え」を行い、遂げられる希望があるのだ」（前掲呉福輝『都市漩流中的海派小説』p.320）。
- また、近年のツーリズムにおける「地域文化」の創出と国家との関係性については、前掲橋本和也『観光経験の人類学』のとくに pp.207-209を参照。
- \*45 たとえば「はじめに」で挙げた「地元就職率」は、地元企業に特権的な地位を与え県外企業を排除するという、きわめて「排他的」な志向を有するものである。
- \*46 いうまでもなく、ハーバーマスの〈公共圏〉のイメージはこれであるし、またインターネット空間がこうした〈場〉になるのではと期待された時期もあった。が、現状のインターネット空間が完全に「我々」と「彼ら」を隔てる装置となってしまうことは、ご覧の通りである。
- \*47 地域文学研究がそれ以外の地域の者にとっては魅力がないというのは実は中国でも同様のようで、前掲閻立飛『城市的文学書写——天津文学与都市文化』の「後記」には、著者の出版社勤務の友人が「売上げが落ちるので、書名にはできるだけ「天津」を入れないようにしている」と語ったということが記されている。
- \*48 前掲拙稿『中国化する日本』書評」参照。
- \*49 拙稿「穆時英における戦うことの意味——革命・国家・共同体——」（『高知大国文』第35号、2004）。この中ではリチャード・ローティ『偶然性・アイロニー・連帯——リベラル・ユートピアの可能性——』（斎藤純一他訳、岩波書店、2000）を引用し、論を組み立てている。

（たかはし・しゅん 本学教授）